

古代集落の諸類型

— 集落研究の現状と方向性 —

道上祥武（奈良文化財研究所）

I はじめに

古代官衙・集落研究集会では、2020年12月、「古代集落の構造と変遷」(古代集落を考える1)として研究集会を開催した。近年、古代集落遺跡の分布や消長の分析が盛んにおこなわれており、畿内地域を中心に集落遺跡の動態変化がかなり明瞭になってきている。本企画はそうした現状をうけて、古代集落の構造解明を目標として掲げた。古代集落の具体的な構造と変遷をあきらかにすることは、古代の集落景観を復元するだけでなく、中央の動向に注視されがちな古代社会の形成と変容を、地域社会の視点から実態を踏まえてとらえ直すことにつながる。

Ⅱ章で触れるように、古代の集落構造の復元とそれにもとづく集団編成原理の解明は、元来、古代集落研究における本質的な問いであった。しかし、こうした取り組みは90年代以降、一部の分析を除くとほとんど進められていない。それは、集落遺跡が全国・全時期を通して普遍的に存在し、事例があまりに膨大であること、それゆえに多種多様であり、統一的な把握が困難であること、広く面的に調査した良好事例が少ないことなど、古代集落遺跡のもつ基本的性質に起因するところが多い。こうした実情は、調査・研究技術が発達した現在でも同様であり、できるだけ多くの分析事例を集めて、具体的な情報を蓄積していくほかはない。ただし、そこには膨大な作業量が予想されるため、本企画は複数年度にわたる取り組みを前提としている。

本稿は、古代集落遺跡研究を進めていく上での現状の課題と今後目指されるべき方向性、その具体的な分析手法や視角の共有を目的とする。まず第1に、古代集落遺跡研究史を振り返り、現状の課題と本企画の目標の明確化を図る。第2に、広瀬和雄の古代集落分類を取り上げ、古代集落構造の把握方法について再検討をおこなう。第3に、畿内の古代集落遺

跡について若干の分析をおこなう。

Ⅱ 古代集落遺跡研究史

本章では古代集落遺跡の研究史を振り返る。周知のとおり、古代集落研究は考古学諸分野でも厚い研究史の蓄積をもつ分野の一つであり、その研究史を網羅的に取り上げるには紙幅が足りない。したがって、本企画の趣旨に則り、古代集落遺跡の特に遺構の分析に関わるものを中心に、これまでの研究動向の把握に必要なものを取り上げた。そのため、きわめて限定的な研究史整理となっているが、本企画における役目は十分果たしているものと考え⁽¹⁾。

上記の方針にもとづいて研究史をまとめたものが図1である。古代集落遺跡の主要な研究成果とその流れ、画期となった調査、関連分野の動向を示している。古代集落遺跡研究は、その手法から「集落構造分析」「集落動態分析」に大別が可能であり、その内容は、概ね以下のようにまとめられる。

集落構造分析：集落遺跡を構成する竪穴建物・掘立柱建物の規模や構造、配置の分析を中心に、耕作地や区画施設などを含めた集落景観の復元と居住集団の編成原理を論じる。個々の集落遺跡を主な分析対象とする。

集落動態分析：集落遺跡の消長、分布、立地とその変遷に着目し、これらが大きく変容する「画期」をとらえる。あらゆる「画期」の分析を通じて、その背景にある歴史的動向や環境変化といった、社会変化を論じる。広範囲かつ複数の集落遺跡を主な分析対象とする。

これはあくまで大別だが、各時代において集落の構造と動態、どちらが重視されてきたかに注目して、

研究史を振り返っていく。

(1) 第1段階 — 古代集落遺跡研究の黎明

古代集落遺跡研究の歴史は古く、戦後間もない和島誠一の研究にさかのぼる(文献117・118)。和島は縄文時代から古代の貝塚・集落遺跡を分析し、個々の竪穴建物を世帯、複数の竪穴建物による小集団を後の郷戸、さらに、その集合である集落遺跡を後の里につながるものと論じた。和島集落論は当時の古代家族論を前提としている側面が大きい(文献7・93)、集落遺跡を「竪穴の小集団」による複合体とみる、現在にも通じる視点をすでに示している。その後、近藤義郎や都出比呂志は和島集落論を引き継ぎ、治水・灌漑にもとづく共同体論を展開する(文献44・67)。資料が少ない理論先行の時代ではあるが、古代集落遺跡研究の黎明は集落構造分析であったといえる。

(2) 第2段階 — 集落構造分析の展開

1970年代後半には、開発の増加とともに関東を中心に古代集落遺跡の調査事例が急増する。千葉県東金市山田水呑遺跡、同八千代市村上込の内遺跡など、丘陵上の集落を広く調査した例が多くみられ、報告書でその変遷を含めた集落構造の考察がおこなわれている(文献97)。

この頃から西日本でも古代集落遺跡研究が本格的に開始される。原口正三は大阪府内の集落遺跡について、古墳時代後期から古代・中世の集落構造の変遷を論じた(文献82)。また、広瀬和雄は当時、西日本の古墳時代集落について類型化を試みている(文献88)。集落遺跡を「単位集団」による組み合わせで類型化する広瀬の方針は、後述する古代集落遺跡の分類とほぼ共通する。異なる視点からの研究として、小笠原好彦は西日本の掘立柱建物集落遺跡の考察をおこなっている(文献23)。この段階には集落構造の詳細な分析が活発に進められた。その背景には、良好な調査事例が増えたという現実的な理由に加え、第1段階にみられた理論先行の集落研究から、より実証的な研究を、という意識があったとみられる。

集落構造分析が進展する傍ら、集落動態分析もこの段階から始まっていく。能登健は赤城山南麓の集落遺跡の立地、消長をまとめており、居住域の変化と耕地の拡大が一体的に進行することを論じている(文献77)。高橋一夫は「ある一定の時期に突如出現し、

ある一定の時期に突如消滅していく大型集落」について、直木孝次郎による「計画村落」の概念を適用させて論じた(文献61・71)。当時の高橋の考え方の背景には、山田水呑遺跡の調査成果とその考察による影響も大きい。

また、この段階には文献史学の研究者による村落研究が多くみられる。鬼頭清明、吉田孝、森田悌などの研究があり、中でも鬼頭清明は集落構造について深く言及している(文献29)。鬼頭は東国の古代集落が集落全体で倉を共有している点を取り上げ、畿内地域に比べて、東国の集落では集落内小集団(竪穴住居の小グループ)の独立性が低いことを指摘する。鬼頭が挙げた中田遺跡の事例は、その後、都出比呂志によって否定されている(文献68)。しかし、集落全体で共有する倉庫の存在については、一考の余地があるように思われる。

以上、70年代後半から80年代初頭には、古代集落遺跡研究の地域、分野、方法が大きく展開した。黒崎直は当時、集落研究の課題に「個々の集落跡やそれを構成する個々の住居跡の分析を基本に、人間集団の営みを具体的に復原すること」を第一に挙げている(文献32)。分析の幅は展開したが、集落構造分析がなお集落研究の中心であった。

(3) 第3段階 — 古代集落遺跡研究の動揺

こうした状況が大きく変化する契機は、群馬県子持村(現渋川市)における黒井峯遺跡の発見である。黒井峯遺跡の具体的な内容は割愛するが、火山灰層に覆われた集落遺跡が発掘され、多様な住居形態や関連施設の存在があきらかになった(文献4・5)。黒井峯遺跡をはじめとする災害遺跡の発見によって重要な成果が得られた一方、建物群の分布・方位、出土土器の検討にもとづく従来の集落遺跡研究(構造分析)の信頼性に大きな動揺が生じることとなった。こうした雰囲気は、当時の研究会や雑誌の特集からも読み取ることができる(文献13)。第2段階から続く研究手法の模索に加えて、黒井峯遺跡の発見が与えた影響は大きく、1980年代後半以降は集落動態分析が主体となっていく。その中で集落動態と王権の関わりを積極的に論じる研究も現れてくる(文献10)。

(4) 第4段階 — 古代集落遺跡研究の総合期

1990年前後は構造分析が主体だった昭和の古代集

落遺跡研究の到達点といえる。古代集落に関する研究会や雑誌の特集が多く組まれており、既往の研究成果をまとめた書籍も出版された(文献69)。後述の広瀬和雄の論文を含む国立歴史民俗博物館研究報告には出土文字資料の成果も含んだ、古代集落に関する多様な論考が掲載されている(文献38)。また、千葉県立房総風土記の丘で開催されたシンポジウムでは実際の分析作業はもちろん、黒井峯遺跡発見以後の古代集落研究をどう進めていくか、現在に通じる重要な提言が多数なされている(文献65)。

黒井峯遺跡、西組遺跡、中筋遺跡など災害遺跡を対象に積極的な分析がなされた一方(文献55・60)、その他の集落遺跡に関する構造分析はこれ以降、ほぼみられなくなり、集落研究の中心は動態分析へ移っていく。2000年代は比較的集落遺跡研究が少なく、90年代研究動向の延長としてとらえておく。

(5) 第5段階—2010年代の古代集落遺跡研究

2010年代から現在、集落動態分析は大きく飛躍する。埋蔵文化財研究集会、古代学研究会の活動によって、畿内地域の集落動態はほぼ網羅的に整理された(文献41・42・96)。細かな認識の差はあるが、消長や分布が大きく変化する画期が存在し、その画期が弥生から古墳、古墳から古代といった大きな社会変化とリンクすることはほぼ共通理解になりつつある。

一方、地方官衙遺跡の調査によって出土文字資料の事例とその分析が進み、文献史学と考古学の協同が改めて期待されている。領域の把握や地域における支配構造の実態は、文献史学でも重要視されているが、実際の集落構造にはまだ踏み込めていない。

III 古代集落遺跡研究の課題

本企画の課題として以下の3点を挙げる。

(1) 再び集落構造分析を

古代集落研究の停滞が叫ばれて久しく、「集落研究の停滞」は当該分野の枕詞となっている。しかし、今回振り返ったように、古代集落研究は継続的におこなわれてきた。特に、ここ10年の動態分析の進展は目覚ましい。それでもなお、古代集落研究は停滞していると評価され、実際にそういう印象を払拭できていない。その理由は、集落遺跡の調査事例が増加

し、動態の整理が進む一方、古代集落の具体的構造がいつまでもみえてこないというギャップにあると考える。かつては古代集落研究の中心だった構造分析は際限のない資料の増加と画期的な調査事例の出現により、後景に退いている。

1989年の房総風土記の丘のシンポジウムで同様の指摘があるように、「奇跡的」な良好事例の分析だけでは不十分である。良好事例は受け止めつつ、その良好事例の存在形態がその他の集落にどこまで敷衍できるかという検討がおこなわれるべきである(文献98)。そのためには、多くの集落遺跡が資料化され、具体的な情報が蓄積されている必要がある。遺構の同時性の認定基準など、集落遺跡のもつ資料的な困難は70・80年代も現在も変わらないが、それでも具体的な集落構造を提示し、相互に検証を重ねていく地道な基礎的研究こそが、集落構造分析を前進させる唯一の方法であろう。

(2) 動態分析と構造分析の融合

畿内地域の集落動態に関しては古代学研究会による取り組みがあり、鈴木一議・中野咲らは6世紀後半～7世紀前半を中心に、集落立地や消長が変化する画期を指摘する(文献57・58・74)。その他、関東や九州など各地で集落動態の把握が進んでおり、畿内地域との差異もあきらかになってきている(文献6・17・86)。ただし、こうした集落変動と集落構造の相関関係については、これまでまだ十分な検討はなされていない。

また、集落変動の要因もさらに考えなければならない。中野咲が指摘するように、古墳時代から古代の集落立地の変化について、交通や生産といった、耕地開発に限定されないあらゆる要因が想定される(文献74)。筆者はかつて古代畿内地域において耕地開発を背景とする王権主導の集落再編成があった可能性を論じたが、実態面の検証はなお不十分であった(文献101)。集落構造の変遷をとらえた上で集落動態の変化を改めて検証することで、集落研究は新たな段階へと進むことができるだろう。

(3) 関連領域との連携

古代集落の構造、景観を考えるには建物の分析だけでは不十分で、耕作地などの生産域を含んだ景観を意識した検討が必要である(文献30)。また、道路や